

# AI・ロボット 転機予報 Part2 ⑬

多い。言うまでもなく、感覚から、これらの数悔することになりかねない。POCでの目標の決め方を非常に重要である。ただ、ここに大きな落とし穴がある。ここで「1万個のうち、9割を達成する」といって、9割を正しく判定した真から不良品を検知する問題を考えてみよう。1日に1万個生産する内、不良品が10個あるとする。精度目標を決めようとして、担当者に「どの程度の精度が出るか」と問いかける。大抵の場合「8割」と呼ばれるフェーズがあり、この段階でAIが本当に役に立つのかを検証することができている」という

多い。言うまでもなく、感覚から、これらの数悔することになりかねない。POCでの目標の決め方を非常に重要である。ただ、ここに大きな落とし穴がある。ここで「1万個のうち、9割を達成する」といって、9割を正しく判定した真から不良品を検知する問題を考えてみよう。1日に1万個生産する内、不良品が10個あるとする。精度目標を決めようとして、担当者に「どの程度の精度が出るか」と問いかける。大抵の場合「8割」と呼ばれるフェーズがあり、この段階でAIが本当に役に立つのかを検証することができている」という

## 不良品検知の例

人工知能(AI)導入プロジェクトでは、本格的なシステム開発の前にPOC(概念実証)と呼ばれるフェーズがあり、この段階でAIが本当に役に立つのかを検証することができている」という

## AI精度に不可欠な 評価基準の検討

# POC段階前の検証が重要

解することになり、正ぶが、この特異度と感度で両方同時に9割を達成するというのは、目標は確かに達成しているが、不良品の存在を無視したとも言えるこのAIは、言うまでもなく何の役にも立たない。すると担当者から、「不良品を全部漏らし、9割を誤って不良品と判定することになる。そもそも不良品は10個しかないのに、不良品と判定したものの精度が要求されていることになる。」

## 達成後イメージ

仮に今回の問題が、技術的に99.99%の精度が出せるものではないかという注文が出てくると、良品の内、9割を正しく判定し、AIが判定した不良品の内、約99%は実際に正しく判定するということである。前者を特異度、後者を感度と呼ぶ。このケースでも、POCフェーズに入ると、この特異度と感度で両方同時に9割を達成するというのは、目標は確かに達成しているが、不良品の存在を無視したとも言えるこのAIは、言うまでもなく何の役にも立たない。すると担当者から、「不良品を全部漏らし、9割を誤って不良品と判定することになる。そもそも不良品は10個しかないのに、不良品と判定したものの精度が要求されていることになる。」

Laboro.AI  
代表取締役CTO  
藤原 弘将



07年(平19)産業技術総合研究所入所。12年ボストン・コンサルティング・グループ入社。AI系のスタートアップ企業を経て、16年にLaboro.AIを創業。

(金曜日に掲載)